

園番号 705

令和元年度 奈良市立青和こども園 研究実践概要

園長名 林 陽子
全園児数 158名

1. 研究主題

「遊びにおける幼児の学びを探る」

— もの・人・こととの関わりの中で —

2. 研究年度

初年度

3. 研究主題設定理由

幼児期は生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して心身が著しく発達する時期であり、自発的な遊びを通して、心と体を十分に動かして発達の課題を達成していくことが大切である。そこで、子どもたちが遊びを創造していく中で、もの・人・ことに関わり、主体的に取り組む中での育ちや学びの過程を探り、学びを豊かにする体験を生み出した環境構成や援助について探っていきたい。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもたちがもの・人・ことに関わる中で、自発的な活動を通しての遊びの中で豊かな学びにつなげていくための環境構成や援助を探る。

②研究の重点

- 研究主題について共通理解をし、具体的な取り組みを日々の保育の中で実践する。
- 子どもが遊びを通して何を学んでいるのかを振り返る。
- 学びを生み出した環境構成や援助について探る。
- 自己発揮しながら意欲的に遊ぶ3歳児から5歳児の発達の姿を捉える。

③活動の方法

~~~~~ 学びを生み出した環境構成や援助

#### 【事例1】「キリンさんにえさをあげられた！」 3歳児 10月～11月

動物園の遠足での感動体験を、遊びに活かせるよう、段ボールでつくったバスを用意したり、子どもがかいた絵をサーキットの中に設置したりした。玉入れのところでは、かいたキリンと組み合わせ、玉を入れるとキリンにえさをあげているようにした。「バスに乗ろう」と友達と一緒にバスに乗って周遊したり、設置した動物を見て、「前に見た動物さんだね」「キリンさんもいる」と、サーキット遊びに興味をもち、喜んで取り組んだりする姿がみられた。サーキット遊びの中で、「キリンさんにえさをあげよう」とキリン

の玉入れに取り組む中で、玉を入れにくい A 児は、玉が入るよう挑戦する中で、手を伸ばして上の方に投げかごに入れようと工夫したり、台の上でジャンプしてかごに入るよう試したりして、自分なりに体を使いながら繰り返し挑戦する姿がみられた。やっと玉が入った時の喜びは大きく、保育者が「しっかり手を伸ばしてジャンプしたら玉が入ったね」と認めたことで、保育者の声が周りの子どもたちに届き、自分もやってみようと思いつながり、サーキット遊びに取り組み始めた。

#### (反省・評価)

- ・ 動物園へ行った共通経験を活かし、絵にかいた動物をサーキットに置くことで、視覚的に動物園での経験を思い出し、楽しさを感じるとともに、保育者の言葉がけで、興味をもったり、面白さに気づいたりし、喜んで遊ぶ姿となった。子どもたちがやってみようと思いつながり、自分もやってみようと思いつながり、サーキット遊びに取り組み始めた。
- ・ サーキットの中に挑戦できる場をつくることで、A児のやってみようとする意欲を促すことにつながった。A児が、体の使い方を自分なりに工夫したり試したりして、玉を入れることができるようになったことを、保育者や周りの子どもたちも認めることで繰り返し挑戦する学びへとつながった。子どもたちの発達に必要とする体験を意識して保育活動に取り入れることが大切であると感じた。

#### 【事例2】「こまのコースをつくろう！」 4歳児 1月

数人の幼児が板の上で一緒に糸引きこまを回し始めた。A児とB児が「せーの！」と声を合わせて一緒に回したり、C児やD児が「勝負しよう」と加わり、競い合ったりして遊んでいた。そこで、C児が板の下に足を入れると斜面ができることに気づき、こまが回りながら滑る様子におもしろさを感じている姿があった。「おもしろいね」と、思いに共感することでA児やB児もおもしろいという表情で板を持ち上げ始めた。しかし、板が安定しないことに気付いたA児が「すぐに滑るからずっと回らないやん」とやめてほしいように強い口調で話すが、C児は「上げた方がおもしろいよ」と言い、しばらくの間板を上げたり下げたりしながら、幼児同士で話をしていた。C児の気づきを誘発するようにさりげなく近くに積み木と細い板を置き、タイミングを見計らって「使ってみる？」と提案すると、C児「おもしろそうやん」と言い、A児とC児とD児が「コースをつくろう」と目的が一つになり、コースをつくり始めた。「板の上でも回るかなあ」と何度も試して遊び、こまはその場で回ったりすぐに落ちたりした。その姿を見守り、「細い坂の上でも回っているね」「すぐに落ちちゃうね」「落ちても回っているね」と様々な楽しみ方に気付くように声をかけると、A児が「落とし穴をつくろう!」と空洞になっている積み木を持って来て、板から落ちた時に落とし穴に入るかを楽しみ始めた。他の幼児も集まって来てこまを回す中、B児が「じゃあ落とし穴に入ったら負けにしよう」と提案し、他の幼児も「うん、やろう」と回し始めた。約束や遊び方が決まったことを見計らい、みんなで遊べるように保育者が開始の合図をだすことで、みんなで一斉にこまを回し、勝敗を楽しんだ。「もう一回やろう」と幼児同士で声をかけ合って遊び、さらにコースを考えたり、「穴に入ったら1点な」とおもしろさを見出したしながら、遊びがどんどん広がっていった。

(反省・評価)

- ・ 友達と思いを出し合いながら遊ぶことを楽しいと感じているこの時期、積み木や細い坂をさりげなく準備したことで細い板の上でもこまがまわせるか試し、様々な回し方を楽しむきっかけとなった。また、積み木を組み合わせてのコースづくりに広がり、遊びが発展していった。幼児の興味関心を活かし、知的好奇心を刺激するきっかけとなる環境構成や援助をすることが、学びにつながり、さらに楽しい遊びを創造していく姿となると感じた。
- ・ 友達の姿が刺激となり、自分も繰り返し試してみよう、もう一回してみようと夢中になれる環境があることが学びにつながっていくと思われた。

【事例3】「面白い仕掛け どうしようかな…」 5歳児 10月～12月

遠足で見た動物の迫力に感動した子どもたちは作品展に動物園をつくりたいと提案してきた。どんな動物園にしようかと話し合う中、昨年度の5歳児が4歳児だった自分たちを作品展に招いてくれた経験を思い出し、「4歳さんと呼んであげたい」「ライオンが吠えたときに餌をあげたい」「ゾウの背中に乗るのはどう?」「大きい大きいキリンをつくってびっくりさせたい」など、次々と言葉が出てきて早くつくりたいと意欲が感じられた。「グループに分かれてつくる」「好きな動物をつくる」「ゾウをつくりたい人同士で集まって」など作る方法も自分たちで考え、友達とアイデアや制作に必要なものを伝え合いながら早速、材料探しに材料庫に行ったり、保育者に求めてきたりした。保育者は各グループの話し合いに仲間として参加し、イメージを共通理解し、自分たちで進めていけるように再確認していった。ライオンをつくるグループは「ライオンは、肉食べるやんな」とD児のつぶやきを聞いたC児は「ライオンにエサあげられたらおもしろくない?」と他の幼児に大きな声で伝えた。「お肉をあげる!」「動物園ではできないもんな、そんなこと!」「いいやん!あ、でも、ライオンにエサあげたら噛まれるで?」「みんなに優しくあげてねって言ったら?」「動物園の人みたいにお世話しながらお客さんに教えてあげたらどうかな」「それおもしろい!」と、自分の思ったことや考えたことを伝えたり、友達の思いついたことに笑顔で共感したりしながら話し合いが進んだ。

鼻の上をすべられるよう工夫したゾウ、2階まで長く伸びた首のキリンには口からエサをあげられるように、乗っても壊れないように頑丈にしたシマウマ、1本脚で立たせることにとっても苦労したフラミンゴなど、それぞれに自分たちのアイデアや仕掛け、工夫や考えが詰まった動物が完成し、作品展に展示し4歳児や3歳児を誘って、楽しめる動物園となり5歳児として誇らしげな様子が見られた。

(反省・評価)

- ・ 自分たちで相談して一つの動物をつくろうする中で、今までに経験したことや学んだことが次々と出てきて活かされる様子が伺えた。友達の考えや気づきに刺激され、自分の意見も伝え、意見の食い違いも自分たちで折り合いをつけながら、思いが一つの目的に向かって気持ちが合っていく過程を保育者はしっかりと見守ることが大事だと思った。
- ・ グループの友達と力を合わせて活動をする楽しさや、やり遂げた達成感を味わったことが協同性を育てることにつながった。友達と取り組むことが、楽しいから、おもしろいから、学びが活かされるから、新たな学びがあるから何日も継続して取り組むことができたと思われる。
- ・ 保育者は子どもたちの仲間となり自分たちで進めていけるように、共に考え悩み喜び、子どもたちの気づきを新たな課題につなげ、目的に向かって試行錯誤してきた過程を受け止めることが大切である。

## 5. 研究の成果

- 子どもたちの主体的な活動は学びをもとに、友達との関わりをより充実し、豊かなものとしていく。一緒に遊ぶ相手がいるからこそ子どもたちは育ち、探求心は高まり、創意工夫の努力を継続し、新しい発想を生み出す力となる。子どもたち同士が学び合い育ち合う関係を大事にクラスづくりをしていきたい。
- 3歳児には安心して動き出せる、好きなことにじっくり取り組める、興味をもったことに繰り返し取り組める環境が大切で、保育者の言動そのものが学びにつながっていくことがわかった。
- 4歳児は楽しいと思ったこと、おもしろいと感じたことを思う存分できることが学びにつながりもっとしたいと繰り返し挑戦し、夢中になれる環境が大事で、取り組む中での学びは大きいと感じた。保育者は子どもたちの発想を柔軟に受け止め、心に寄り添い、やってみたくなるような環境を構成することが学びにつながっていくと思った。
- 5歳児は今までに学んだことをどんどん出せるような環境、自分が知らなかったことを知る喜び、もっと知りたいと思う意欲が学びにつながっていくと感じた。保育者は目的に向かい試行錯誤してきた過程を受け止める中で学びを大事に見取り達成感が味わえるようにつなげていくことが大事である。

## 6. 今後の課題

- もっとしたいと夢中になれる環境の下、一人一人の子どもたちが目に見えない学びをたくさんしていることを理解し、子どもたちの内面を探り心の動きに寄り添う保育を進めていきたい。
- 社会の変化の中で、子どもたちの生活は変化せざるを得ない状況にあり、子どもたちの生活体験が限られたものとなっている。そこで、園生活の中での遊びを通して心や体を十分動かせる魅力ある環境を考えていきたい。
- 保育者間のコミュニケーションを充実させ関係性を深める中で、共通の目的をもって意見を出し合い共に考え、動き、学び合うことを積み重ね、保育の面白さを感じ、楽しさにつなげられるようにしていきたい。